

ねじ巻き黒匂
(クロツク)

さんちんさい ともたけ

猫まんまに、チーズを入れといたよ。

『ねじ巻き黒句（クロック）』

生贄に

選ばれたる

悲しみよ

黒句

植木屋さんちの、さっちゃんが作る、
チーズイン猫まんまは、最高！

さっちゃん家の冷蔵庫に、
チーズがある時は、
チーズ イン 猫まんまなのだ。

今日は、ついでる♪

俺が、
そんな事を思っていると、
さっちゃんが、

「猫は箸使わないよ」と。

俺は、
テーブルの上にある箸を取ろうとしていた。
取れるはずはないのに。

そして、自分の肉球を見つめた。

前から薄々感じてた事だけど。
俺は猫なのか？
姿形は、黒猫だ。

でも、意識しないと、
自分が黒猫だと意識しない。

もしかすると俺は人間か？

童話の世界の様に、
何か呪われるような事をして、
黒猫の姿に、
変化させられたのかも知れない。

その事を、
なぜか俺の猫語が解るさっちゃんに、
言ってみた。

さっちゃんの優しい手が、
俺の背中を撫でた。

さっちゃんの手は、
触れるだけで愛情が伝わって来て、
孤独な野良猫だった俺は、泣きそうになる。

さっちゃんは、
小6らしからぬ、大人びた口調で言った。

「まほろば君は（←さっちゃんは俺の事をそう呼ぶ）
何もしてないわ」

「何か知ってるの？」

「まほろば君は、何もしてないのに、
妬（ねた）まれ、蔑（さげす）まれ、
そして、生贄として、黒猫に変化させられたの」

「そんな・・・」

「今の私に言えるのは、これだけ」

そこへ、誰かが帰ってくる音がした。

「まほろばちゃん、逃げて！」

「そんな・・・せっかくのチーズイン猫まんまが！」

「猫嫌いの親父にバレたら殺されるよ！」

その声に、俺はさっちゃん家の庭へと飛び出した。

「不条理な・・・」

さっちゃんは呟いた。

さっちゃんの庭の木陰で、

俳句を詠む黒猫が詠んだ一句。

ゆらゆらと、安楽椅子で眠ったよ。

100円の
ガラス細工に
光あれ！

黒句

ガラス工房の店先の荒れた庭を、
白い雪が覆い隠していた。

寒さに弱い黒猫の俺には、
この雪はかなり堪える。
猫用の自動ドアから中に入ると、
暖炉の牧が、パチリと音を立てた。
暖かさを演出した。

3年前は、
お洒落な店舗を構えたガラス工房だったのだが、
諸事情から、店を仕舞い、
今は殺風景な姿を晒している。

諸事情が何なのか、
人間達の事情など、
黒猫の俺には理解できない。

俺に解るのは、
店を閉めた後には、
1人娘の雛形さんが1人だけ残った、と言う事だけ。
彼女は現在、芸術大学に通う女子大生だ。
元店舗の棚には、
雛形さんが作ったガラス細工が飾ってある。

全部、猫のガラス細工だ。

ちなみにモデルは、全部俺だ。

照れるぜい。

しかし、悲しいかな。

フリマで100円しか値が付かない（泣）

ある日、雛形さんは言った。

「私には才能がないの・・・」と。

「モデルがダメなのかも、
ダメ猫をモデルにしても、やっぱし」
と言う俺に彼女は

「そんな事ない、
マリちゃん（←俺の事）には、
何かある。それだけは、確信してる。」

と、言ってくれた。

嬉しかったけど・・・複雑。

工房の店舗に置いてある、
ゆらゆらと揺れる安楽椅子で、
雛形さんは眠っていた。

確信されてるのに、
好きになってくれてるのに、
彼女に、何もして上げられない。
俺は、ただの黒猫。
雛形さんが作った、
猫のガラス細工達を見ながら、
詠んだ一句。

ガラスの猫を磨いといたよ。

七星の
てんとう虫が
ささやく声（ね）

黒句

俺は黒猫。
シャイな黒猫。
粹な黒猫。

俺の本住まいは、
ねじ巻き時計専門店だ。

店の無口な店主は、俺に、
黒句と書いて、『クロック』
と読ませる名前を付けたが、
無口な店主以外、
その名前を呼ぶ奴はいない。

しかし・・・退屈だ。

可愛い猫が店先にいると、
お客が釣られて店に入ってくる、
とか思って、店先に座っていたが、
誰も入っては来やしない。

人通りの少ない、
商店街の路地裏だから、
仕方ないか

それに、俺、雑種だし・・・。
愛想ないし・・・。

こんな時は、現実逃避に、
自分に酔って、気持ち良くなるのが良い。

俺は、ピッカピカな
ステンレススチールの柱に映る
自分の尻尾の美しさに酔ってみた。

神秘的な漆黑（しっこく）色の長い尻尾だ。

「ナルシスよ」
誰かが、そう囁いた。
見ると、
ステンレススチールに映る俺の額に、
七星天道虫が、停まっていた。

しかし・・・1人酔ってる所を、
見られていたとは、
いと恥ずかしき・・・。

「ナルシスよ、
お前の自惚れがリンクを繋いだ」

「リンク？何？何の前触れもなく」

「見よ、あの喫茶店を」

ねじ巻き時計専門店の向かいに、
こちらよりも幾分、客の出入りがある、
喫茶店がある。

グラスや皿を磨くのが趣味の、

店主がやっている

客席10席の小さな喫茶店。

俺調べだが、1日の客は10人。

ほぼ常連の同じ顔ぶれだ。

それぞれが、

それぞれの時間にやってきて、

必ず決まった席で、ひと時を過ごす。

まるで専用席かのように、

決して他の席に座らない。

そう言った決まりがある訳では、

ないらしいが・・・。

しかし、よくこの客数でやっていける。

ウチのねじ巻き時計屋にも言えることだが、

この路地裏の店は、そんな店ばかりだ。

路地裏は魔化不思議な巣窟だ。

夕方の5時前、この時間に、

寛（くつろ）いでいるのは、進学塾に行く前の、

1人の女子高生。

彼女の専用席は、外向きの、

ねじ巻き時計屋の真ん前。

ちょうど俺が座ってる目の前だ。

彼女はそこで、勉強をしたり、

携帯をイジったり、ポーとしたり、

俺をじーと見つめたりしながら、

小一時間、時間を潰す。

これは秘密だが、

喫茶店の前を歩く人間の目線では、

見えないが・・・

・・・と言っても、前を歩く人間など、殆どいない。

あ～あ、商店街の表通りから、賑やかな声が聞こえる。

ねじ巻き時計専門店に、カムヒヤ～\(^ ◡ ^)/

うん、でも・・・

例え、表通りに店があっても、
ねじ巻き時計専門店と言うマニアックな店に、
誰も来やしない。
さらに商売下手な店主に、愛想の悪い黒猫・・・

これ以上はよそう。暗くなる。
現在俺は、根暗改善週間実施中なのだ。

うん、話を続けようー \(^ ◡ ^)/

↑

無理してテンション上げてる俺

喫茶店の外向きの席に座る
彼女の純白いパンツは、
猫の俺の目線からでは丸見えなのだ。

そんな丸見えの状況なのに、
彼女は「jee」と、無防備な視線で、
俺の漆黒な尻尾を見た。
ちょっと罪悪感を感じなくもない。

「聞け、ナルシス。
純白のパンツと、
漆黒（しっこく）の尻尾は、
IDとパスワードを意味する。
そして両者が見つめ合うと、
リンク先へログインを開始する」
と、俺の耳元に移動したてんとう虫は囁いた。すると、
喫茶店の奥の棚に飾られている、
置物のガラスの猫が、目を覚まし、背伸びをした。

「ナルシスの強力な自惚れ想念が、

ログイン先であるガラスの猫に届き、
魂に火がついたのだ」

「あっ、あれは、雛形さんが作ったガラスの猫」

「そう、お前の分身たるあのガラスの猫は、
天賦の才を有する芸術家のみを作り得る、
魂が籠（こも）り得る芸術品だ」

「凄い、凄いよ。雛形さん、
やっぱり雛形さんは天才だったんだ！
100円でしか売れないのは、
まだ時代が追いついてないだけなんだ！
嬉しい————！早速、携帯でお知らせだ♪
……って、俺、猫だった……
携帯なんか持ってないじゃん」o(____)o

店主はこの時間、
彼女が注文した夕食を、
厨房の奥で調理している頃だ。

今、店には彼女一人だ。

ピッカピカに磨かれた
透明なガラスの猫は、
「スッ♪」と棚から飛び降り、
カウンターテーブルの上を上品に歩いて、
彼女に近づいた。

動くガラスの猫の存在に、
彼女は「ハッ!？」とした。

するとピッカピカに磨かれ、
透明感いっぱいのガラスの猫の身体に、
彼女が心の奥に閉じ込めていた想いが、
「ふぁっと」吸い寄せられた。

そして、まじまじとガラスの猫を見つめる
彼女の目から、いつしか涙が零れおちていた。

ガラスの猫の身体には、家にも学校にも、
居場所がない彼女の今が映し出された。

その映像には、脆いガラスの猫の身体が、
割れてしまうんじゃないかと思うほどの、
惨劇も含まれていた。

それでもガラスの猫は、悠々と、
綺麗な長い尻尾をゆらゆらと揺らした。

その時、俺は、ガラスの猫が次、
何をしようとしているのか、
なんとなく解った。

ガラスの猫の身体には、
彼女の今の映像は消え、
彼女の未来が映し出され始めた。

未来の彼女の側には、
優しげな人が、
落ち込んでる彼女を元気づけようと、
話しかけた。
すると、未来の彼女は、
照れくさそうに微笑んだ。

それを見ていた、
今の彼女の表情から、
笑みが零れた。

ガラスの猫は「どう？」と彼女を見つめると、
彼女にそっと身体を寄せ、
外にいる俺に「チラッ」と視線を贈った。
彼女も、同じく俺に視線を贈った。

俺はそれに答えるように、
漆黒の綺麗な尻尾を振ってみせた。

「それでは、そういう事だ」
俺の頭の上にいた七星てんとう虫は、
そう言うと、路地裏の空へと、飛んで行った。

路地裏の空を見上げながら、
詠んだ一句。

焼きプリン、取っといたよ。

空白を
埋める仕事を
したらしい？

黒匂

銀青色の、コラット猫のコラは
囁くように、クールな口調で話す。

「昔、聞いた話だが、猫の中には前世が
人間だった奴が、結構いるらしい。
人間だった時の感覚が
相当残ってる奴もいるらしい。
お前もそう言う種類の猫じゃないのか？」

「う〜ん、どうなんだろう
もっとリアルな感じがするよな・・・」

そんな話をしながら、
俺たちは商店街の外れに向かった。

商店街の外れには
古い回転寿司屋がある。

実はそこ、
三毛猫に取り憑かれている。

憑りついているのは
『三毛の中将』と呼ばれる

化け猫かも知れないと噂のある街猫だ。

今日は月一の街猫集会日。

回転寿司屋の大將の孫娘が
朝、リボンのついた勝負パンツを
履いて出かけたら、
それが集会開始の合図だ。

孫娘の勝負に掛ける気合が
三毛の中將の妖術を
強力にさせるらしい。

勝負パンツの噂を聞いた俺達は
孫娘の健闘を祈りつつ
回転寿司屋に駆けつけた訳だ。

店の自動ドアには
店休日の看板が掛かっていた。

俺が自動ドアの前に立つと、ドアは
「ゴゴゴゴッ」と音を立てながら開いた。

カウンターには
十数匹の街猫達が回ってくる寿司を
(・▽・)じーと吟味していた。

カウンターの奥では、妖術に掛かった大將が、
ぼんやりとした表情で、寿司を握っていた。

ここの大將は、昔、知る人は知る
超一流の寿司職人だったらしい。

御勞（おいたわ）しい・・・。(T^T)。
コラット猫のコラは、静かに哀れんだ。

「しゅうちゃん、こっち」
と俺を呼ぶのは、白猫の餅子さん。
「しゅうちゃんが好きな、焼きプリン取っといたよ
一つしかないんだよ」

カウンターには、美味しそうな焼きプリンが！
「おいちそう」

白猫の餅子さんは、飼猫で
可愛らしい鈴付の首輪をつけていた。

俺が、餅子さんの隣に座ると
街猫たちの視線が、俺たちに注がれた。

こいつら、俺と餅子さんを
引っ付けようとしているんだ。

しかし、俺は人間から猫に
化けさせられた身……かもしれない。
子供が出来ちゃうと
人間に戻った時困りそうなのだ。

「柊（しゅう）ちゃん、私ね
柊（ひいらぎ）の花言葉を知っちゃった
用心深さ 先見の明 保護
だって。ほぼ、しゅうちゃんだね」

そう言うと
餅子さんは穢れの無い純粹な目で、
俺を見つめた。

「私……しゅうちゃんに保護されたいな」

何て事を言うんだ！この猫ちゃんは！

餅子さん → (*v.v)。 (/ω\) ← 俺氏。
周りの街猫達 |皿|皿) じ～

餅子さんは、
視線に構わず俺に寄り添って来た。
「しゅちゃん、良い香りがする」

そんな甘く照れくさいひと時の最中、
三毛猫の中将の叫び声が響いた。

「疫病神侵入、疫病神侵入、
総員、第一種戦闘態勢を取れ！
クローバー隊は、北北西に進路を取り、
陣形・鋒矢にて、敵を撃滅せよ！
ダイヤ隊スペード隊 ハート隊
陣形・方円にて、周囲を警戒せよ！」

疫病神？第一種戦闘態勢？
この街に来て初めて聞く言葉だ。

「何？何？
ほくほく星に進路
やきいもほくほく的な 」
状況をいまいち掴めないでいると

「黒猫！こっちだ！」
と知り合いの虎猫・タイガー愛が叫んだ。

「誰か黒猫やねん！」Σ\(_ - _);

・・・とボケに対するツッコミのつもりが・・・

店内の街猫達は

(°д°)???

と0コンマ1秒、時間を止めた。

なんでこんななってんの → (°д°)???

その混乱から、
誰かに、いきなり記憶のリセットボタンを押され
頭が真っ白になり、フラッシュバックがいくつも見えた。
真っ白な壁の小さな窓の隙間に
本当の俺っぽい人間が心配そうに俺を見ていた。

はっ、違う、俺は・・・・・・・・・・
黒猫だ・・・・・・・・忘れてた。

タイガー愛は、ボケてないわ。(° m° ;)
ボケてたのは、俺じゃんo(_ _ *)o

俺はあわてて 「ラジャ！」
とタイガー愛の後を追った。

クローバー隊1番手の
タイガー愛は、疫病神を見つけると
まるで虎その者の様に
疫病神の首元に噛みついた。

おおおー
さすが百獣の王 猫科！
霊長類の人間とは、
身体に宿る攻撃本能のレベルが違うのだ！

俺も続いて、襲いかかろうとしたが、
疫病神の奴、俺の攻撃を、
失笑しながら、難なく躲（かわ）した。

えっ、なぜ?????????
俺は・・壁に激突した Y(>_<,)Y

餅子さんの目の前で、
恥を掻かせやがって \(*`^`*)/

疫病神は、
嘲（あざけり）りに満ちたの嫌な表情で
俺を見た。これが奴の本質か？

しかし、疫病神も
次から次へと襲いかかる
喧嘩慣れしたクローバー隊の
敵ではなかった。

とうとう疫病神の泣きが入った。
「参った・・・参った・・・参った」（T__T）
疫病神は何度も言った。

虎猫の次に駆けつけた
2番手・コラット猫のコラは ← しかし、ベタな名前(´艸`)）
厄病神を睨み付け静かな口調で言った。

「ここの商店街は、疫病神、貧乏神はお断りだ
さっさと去るがいい、疫病神」

「どっちがじゃ！疫病じゃ」

厄病神は反論した。
疫病神の意見にも一理ある。

走り回った猫達の性で
店はぐちゃぐちゃだ。

動きを止められた、疫病神の元へ
三毛の中将が近づいた。

「商店街は我々の縄張り・・・
お前は、ルーキーの疫病神か？」

化猫の三毛の・・・違う、
化猫と！噂がある

三毛の中将の気迫に
疫病神は、一瞬で威圧された。

「はい・・・ルーキーです」

「だったら、国道沿いの店に
行ってみてな、あそこには
お前の好きな敵意と悪意が渦巻いている。
そう言うの・・・好きだろ？」

「私らにとって、敵意と悪意は
蜜の味でございます」

「それでは、私が、あないしよう。
さあ今日の街猫集会はお開きだ」

俺たち街猫達は
三毛の中将と共に、回転寿司屋を後にした。

その後、店内から
妖術の解けた回転寿司屋の大将の叫び声が轟いた。
「なんじゃこれ—————！
祟りじゃ—————！
呪われている—————！」

「御労（おいたわ）しい・・・」 °(T^T)°。
コラット猫のコラは、静かに哀れんだ。

「とりあえず、疫病神は追っ払ったから、
許してつかーさい m(u_u)m」
餅子さんは、謝罪した。

三毛の中将たちと別れ
餅子さんを家に送る途中、
「しゅうちゃん、大活躍だったね」
と言われた。

「俺、何もしてないけど・・・」

「しゅうちゃんが、空白を埋めたから
勝てたんだよ」

・・・と意味不明な事を言われた。

空白を埋めたから、勝った？

空白・・・って何？

寒空から降り始めた雪を見ながら、
詠んだ一句

追伸・・・・・・・・

帰り道で、回転寿司屋の大将の孫娘が
しょんぼり(・ω・`)と歩いていた。
勝負は負けた・・・と言うか勝負も出来なかったぽい。

回転寿司屋の孫娘に
さち、あらんことを願う。